

プロトンポンプ阻害薬により認知症リスクが4割増大

高齢者の認知症予防において、認知症リスクに影響を及ぼす治療薬を把握しておくことは重要である。プロトンポンプ阻害薬（以下、PPI）は胃腸疾患に広く使用されているが、認知機能低下に関与することが示されている。本研究では、高齢者におけるPPIの使用と認知症の発症に関連があるかについて検討した。

ドイツ最大の公的医療保険から2004～2011年の入院および外来の診断記録とPPI処方データを用いた。試験開始時に認知症のなかった75歳以上の73,679例を対象に、年齢・性別・既往歴・多剤併用などについて調整し解析を行った。その結果、日常的にPPIを服用していた群（2950例、平均83.8歳、女性77.9%）では、PPIを服用していなかった群（70,729例、平均年齢83.0歳、女性73.6%）に比べて認知症発症リスクが有意に上昇した（ハザード比1.44、 $P<0.001$ ）。

したがって、PPIの服薬を避けることが認知症発症を抑制する可能性が示唆された。今回の結果は、PPIにより脳内アミロイド β 値が上昇するとの最近の薬物疫学分析の一次データやマウス実験の裏付けになる。今後、さらに詳細な関係を解明するために、ランダム化前向き臨床試験が必要である。

出典：Journal of American Medical Association. Neurology. 2016; 73(4): 410-416